

清明

杜

牧

清明の時節雨紛紛

路上の行人魂を断ちんと欲す

借問す酒家は何れの処に有る

牧童遙に指す杏花の村

【作者】杜 牧（八〇三〜八五二年）晩唐の詩人。字は牧之「ぼくし」、号は樊川「はんせん」、陝西省長安県の人。名家の出身にして八二八年進士に

及第後、地方、中央の官を歴任し中書舎人（ちゅうしよしやじん）となつて没す。資性剛直、容姿美しく歌舞を好み、青楼に浮名を流したこともあつた。樊川文集二十卷、樊川詩集七卷あり、阿房宮賦「あぼうきゆうふ」は早年の作にして文名を高めた。年五十歳。

【語釈】*清 明…清明節の日。二十四節氣の一つで春分の日から数えて十五日目 *粉 粉…多く。さかなさま。

*路上行人…路傍の旅人。 *欲斷魂…心が滅入る。もの悲しくなる。 *借 問…借は仮。試みに問うこと。

【通釈】清明の季節であるのに、雨は降りしきつてゐる。雨やどりをしていた一人の旅人は、酒でも飲んで滅入る心を晴らそうと思ひ、通り合わせた牛飼いの少年に、近くに酒屋はないかと尋ねると、はるかかなた、杏の花さく村を指さして教えるのであつた。

【備考】杏（あんず）の花咲く村落の風景が絵の如く浮かぶ、絵画的な叙景詩である。